

2022

September
vol.88
no.966

浄土

monthly
JODO

令和4年

通巻966号



[寺院紀行]

滋賀・彦根 宗安寺 真山 剛

一言放談より

寺々刻々

念仏の根拠

阿満利麩

從軍僧・北川一有師の大東亜戦争

鶉飼秀徳



浄土

2022/9月号 目次

カラーグラビア=寺院紀行 滋賀・彦根 宗安寺	真山 剛	1
寺院紀行 滋賀・彦根 宗安寺	真山 剛	6
法然上人の言葉⑤ 念仏の根拠	阿満利磨	14
寺々刻々②③ 従軍僧・北川一有師の大東亜戦争 ...	鶴飼秀徳	18
開教奮闘記2 (東京・多摩 林海庵)	笠原泰淳	22
みんなの境内 三康図書館	新屋朝貴	28
インド紀行②④ パールフトの巨大な欄盾	佐藤良純	29
漫画「浄土宗のお祖師様」三祖良忠上人⑬	ぐんじまん	33
あなたもお寺のCIO ⑥ キャズムを超えろ	小路竜嗣	36
微風吹動 別れの酒	石田一裕	40
江戸 日本の街道探訪 第17回 甲州街道3	森 清鑑	44
編集後記		52

表2 古物漂流⑰

三宅政吉



表紙題字=中村康隆元浄土門主

表紙絵=清岸寺第四十四世 原口正弘

アートディレクション=近藤十四郎

2

稲城市のマンションで 新寺スタート

開教奮闘記

林梅庵開山上人

笠原泰淳



かさはら たいじゅん

昭和三十三年東京生まれ。慶応大学経済学部卒。日本通運(株)に入社、八年勤務し浄土宗東京教区貞源寺の故藤木芳清師に師事。佛教大学に学び、浄土宗僧階取得。東京教区心光院に約十年勤務。平成十四年「林海庵」設立、翌年林海庵が浄土宗寺院に承認され住職となる。現在、浄土宗開教振興協会副理事長。

平成十三年、開教の準備を進めていた当時のことだ。お世話になつていらっしゃる方々に状況を説明し、ご理解を頂かなくてはならない、ということ、まずは師僧に相談した。

前回少し書いたが、私は在家出身だ。実家の宗派は浄土宗であり、当時の菩提寺の住職（東京教区城北組貞源寺の藤木芳清上人）に弟子入りを志願したのである。

今だから分かるのだが、弟子を取るといふのは大変なことだ。師僧には大きな責任や負担（時間的、経済的、心理的）が生じることになる。ましてや檀家とはいえ赤の他人だ。それまで親しい付き合いがあったわけでもない。当時私は三十二歳、師僧は四十四歳だった。

初めて弟子入りを志願した時、師僧の答えはこうであった。

「やめておきなさい」

そして、このように言われた。

「仏教を世に伝えたいのであれば、学校の教師になりなさい。人は若い頃から宗教的素養を身につけるようにしなければいけない。年を取つてからは遅すぎる。だがお寺には若い人はなかなか来ない。だから若い人に仏教を伝える仕事に就くとよい。僧侶ではなく教師になりなさい」

なるほど、師僧が言われるのにも一理ある。だが私は思った。自分自身はどうか。自分が仏教に関心をもつようになったのは二十歳を過ぎてからだ。それも学校で教わつて仏教に興味をもつたわけではなく、きっかけは読書を通じてである。それまで知らなかった（驚くような）仏教の世界に触れたからだ。子供の頃に仏教やお寺に触れる機会とはほとんどなかった。確かに子供の頃からお寺や仏教に馴染んで心豊かに成長してゆく人もあるだろう。だが、大人になってから仏教の価値に初めて気づく人もいるはずだ。そういう方々のために力を尽くしたい。私は教師ではなく僧侶として

生きてゆきたい。

そこで二度三度と菩提寺に足を運び、何とかお願いできないかと頭を下げた。

「…分かった。ではうちに籍を置いて上げるから」というわけで、全く何も知らない私を弟子にして頂いた。その後、佛教大学の通信課程に学び、増上寺の法式教室に通い、無事加行成満。翌年の春には、職員を募集していた心光院に紹介して頂いた。

さて開教Ⅱ新寺建立の話为师僧に相談すると、師僧は困惑された。

「これは宗務庁の進める事業だろう。まず君が宗務庁の職員となって、宗務庁の職員として取り組むべき仕事ではないだろうか」

確かにその通りだ。私の開教活動に関して、責任は誰が取るのか。もしうまくいかなかった場合、どうするのか。師僧は私が宗務庁職員になれるように交渉されたようだ。だが結果は師僧の思うよ

うにはならなかった。宗務もその体制を取ることができなかったのだろう。あちらもこちらも手探りの状態でものごとが進んでいるようであった。私としては是非開教に進みたいのだが、師僧にこれ以上迷惑をかけるわけにはいかない。

結局は師僧が折れ、宗務の実情に合わせることになった。貞源寺所属の国内開教使として、活動を始めることになったのである。(二年後には一宗から新寺の寺院認証と住職認証を頂き、貞源寺から独立することとなった。)

手探りの状態といえば、東京教区についても同様であった。開教使候補者と開教の候補地は決まった。だが東京教区の意向を無視して一宗だけでことを進めるわけにはゆかない。東京教区で認めて頂かないことには宗務でも話が進まないのだ。だが東京教区にすれば、これは一宗の施策である。一宗が責任を持つてくれないことには、教区とし

稲城市のマンションがスタートとなった林海庵。ポストには「林海庵 笠原」と記した

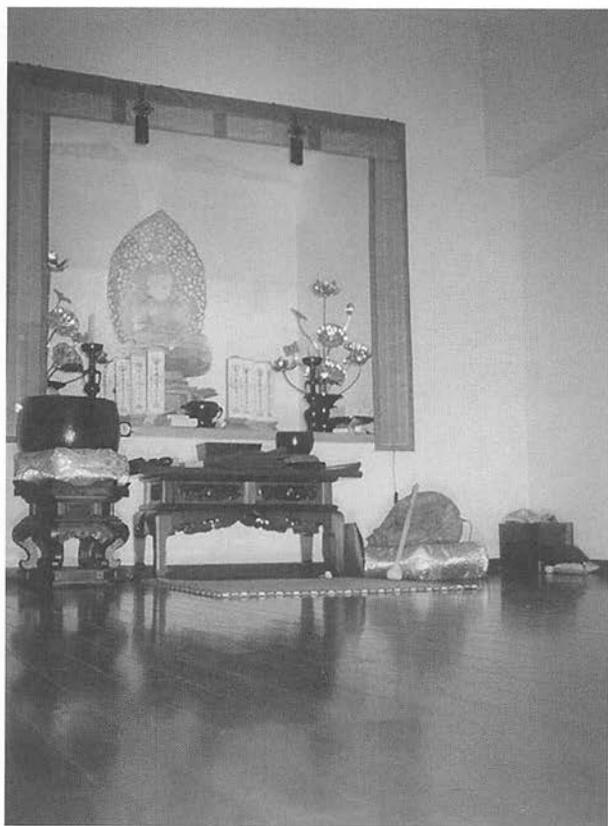


でも安易に認めるわけにはいかない。お見合い状態（？）であった。

調整にしばらく時間がかかった。私の知らないところで、宗務・教区・組の役職にある多くの方々が頭を悩ませながら、何とかこの事業を進められるように調整して下さったのだと思う。当時は無我夢中の私だったが、今振り返ってみて、深く感謝の思いに満たされる。

師僧の次に相談したのは勤務先の心光院だった。住職の戸松義晴師は当時から浄土宗総合研究所で活躍されており、開教についても理解があった。「大丈夫、きつと成功するよ」と励まして下さった。そして、心光院で私を可愛がって下さった檀家総代さん。実を言うと、私の中ではこの総代の意見がとても重要であった。

「いやいや、開教なんて言わないであなたはもう少し心光院で頑張って欲しい」



マンションでスタートした林海庵の出窓も利用した本堂

万が一そう言われたらその意見を無視するわけにはいかない。それほど総代にはお世話になっていた。心光院の寺報の編集補佐、ヨーガクラス、さらに檀信徒の作文集の制作など、当時心光院でさせて頂いた仕事の多くを、この総代との共同作業で行っていたのだ。人間的にも素晴らしい方で、今でも深く尊敬している。

「：新寺建立の事業に取り組むことになれば、心光院の勤務とは両立できません。心光院は辞めることになるでしょう」

こう申し上げると、総代は明るい声で言われた。「いやあ、そういう新しいお寺があつてもいいではないですか。応援しますよ」

背中をドンと押して頂いたようであった。

すぐに場所探しを始めた。第一候補は多摩市内である。賃貸の一戸建て、信徒さんに集まって頂けるような広い部屋のある物件はあるだろうか。

寺院のような、あるいは昔の家のような、襖を外せば和室の二間、三間が続きで使えるような物件はないか。そのような都合の良い家はみつからなかった。どの物件もさほど古い築年ではない。家族それぞれの個室が、壁で仕切られているような間取りの家ばかりであった。

マンションの一物件が目止まった。いわゆるメゾネットタイプの部屋で、内階段から二階に上がれるような間取りになっている。二階部分は風呂の他にひと部屋だけあつて九畳半。決して広くはないが、ここで一〇人程度の人が集まつてお念仏をできるであろう。「ここだ！」気持ちには決まった。場所は多摩市ではなく隣の稲城市。とりあえずの仮の拠点として、すぐに契約した。

転居したのは、地下鉄の中で初めて開教のお話を頂いてから三ヶ月後であった。(つづく)